

										赤煉瓦倶楽部舞鶴 会報	
										発行人/会長 吉岡博之	
										編集人/小野 章	
										〒625-0062 舞鶴市森973番地の1	
										FAX/0773-63-9764	
										E-mail brick7388@yahoo.co.jp	
赤煉瓦倶楽部舞鶴											
会報124号 令和5年(2023年)10月31日											
「赤煉瓦倶楽部舞鶴」ホームページ										http://www.redbrick.jp/	

目次

1. 「舞鶴線を支える赤煉瓦を巡るバスツアー」実施報告	3. 戦争の惨禍を免れた歴史遺産を考える
2. 市長との対話集会「赤れんがの保存と活用」への参加報告	4. 近代化遺産の保存に向けた取り組みについて(市HP)
	5. 図書のご紹介

1. 「舞鶴線を支える赤煉瓦を巡るバスツアー」実施報告	吉岡博之(会長)
-----------------------------	----------

さる10月22日(日)、JR舞鶴線(東舞鶴駅～綾部駅間)及び、JR山陰本線の綾部駅～福知山駅間(当初は舞鶴線)の鉄道施設に存在する赤煉瓦施設をバスで巡るツアーを実施しました。

赤煉瓦倶楽部舞鶴では、来たる令和6年(2024)に官設舞鶴線の開通120周年を迎えることから、市民の皆さんに関心を持っていただくため、昨年には関連する鉄道写真や資料の展示会を開催し、JR東舞鶴駅～福知山駅間の鉄道橋脚などの赤煉瓦施設の現地確認調査を3回に分けて実施しました。(詳細は会報120～122号参照)

今回のバスツアーは、昨年の確認調査結果を皆さんと共有するために企画したものです。ツアーには、会員10名と一般市民7名の計17名の参加がありました。120年の風雪を耐えて鉄道を支えている赤煉

瓦と石材を組合せた橋梁の橋台や橋脚、馬蹄形のトンネル、さらにはレンガ色に塗装された上路プレートガーダ鉄桁などには独特の迫力があり、参加者は「すごいなー！」と言いながらカメラのシャッターを押していました。また、大阪泉州地域の煉瓦製造会社の刻印が確認された施設では「新発見やでー！」と大変盛り上がった一幕もありました。さらに、8月26日に開館した福知山市鉄道館フクレル、福知山駅南口公園でC57蒸気機関車と転車台や明治期の阪鶴鉄道の輸入レールを再利用した東屋などを見学しました。

秋晴れの好天に恵まれ、バラエティーに富んだ鉄道煉瓦施設を見学した有意義なバスツアーとなりました。最後に、遠く東京からご参加いただいたK様ありがとうございました。



舞鶴市第六伊佐津川橋梁付近



舞鶴市真倉第四伊佐津川橋梁



綾部市上杉～於与岐橋梁



綾部市梅迫付近梅迫第三橋梁



綾部市川糸町旧下由良川橋梁橋脚



福知山市土師淵溝橋梁



福知山鉄道館フクレル見学



福知山駅南口公園のレール東屋



第四伊佐津川橋梁の傍らにて

2. 市長との対話集会「赤れんがの保存と活用」への参加報告

馬場 英男（理事・顧問）

市長との対話集会「赤れんがの保存と活用」が10月14日（土）午後2時から赤れんが2号棟にて2時間限定で開催された。発言者は7名、傍聴者は先着順の約40名であった。市長の質問で発言者が挙手して意見や要望を述べる形式で、いわゆるブレインストーミング会議方式によると事務局から冒頭に説明があった。他人の発言を非難しないルールで行われスムーズに進行されたと感じた。私は、任意団体「赤煉瓦倶楽部舞鶴」を代表する自由人として参加することになった。自己紹介、現文科省所管で舞鶴市が委託管理している赤れんが3棟の魅力、活用方法、現在海上自衛隊所有地いわゆる三角地に残されている赤煉瓦倉庫の活用、赤れんがパーク全般などについてと質問の流れで進行された。予定していた2時間いっぱい熱心な意見交換ができ閉会となった。

倶楽部代表としての発言要旨は、国三棟の魅力については、国道沿いの自衛隊所管の3棟の内の明治34年築の2棟と、今回検討の国三棟の明治35年築の建物は他の赤れんが建物に比べて、当時の建築技術者が特に注力したもので、軒下蛇腹のディテールが凝った作りで素晴らしいし、窓の上下の石の使い方や建物基礎部分の石積みの作りが丁寧であること、また、内部は、7号倉庫しか見ていないが当時使われたエレベーターがそのままの姿で残っており大変貴重なものがあると述べた。

赤れんがパーク全般については、【以下、発言していないが参考として記述、平成20年当時故森口清滋理事が企画部で赤煉瓦担当として内外の有識者を招聘し苦労して立ち上げた「舞鶴市赤れんが倉庫群保存・活用検討委員会」（委員長・故北沢猛氏）が平成20年から2年間にわたり検討し市長に提言したのが「舞鶴赤れんがアートスクール構想」である。赤れんが倉庫群の保存・活用方策として、「芸術文化の拠点を造る」「子どもの創造性を育む」「近代化の歩みを伝える」「豊かな食文化を楽しむ」の4つの機能を考えた

ものである。その構想は今も色あせていない。特に「子どもの創造性を育む」が現在の運営で欠けていること、及び芸術文化の視点で取り組むことの重要性を特に述べた。更に、国三棟の活用について、産業フェアの会場として、アートの拠点づくりとして、文化イベント、ミュージック・アート、シネマの創造空間としての活用を提案した。

次に、将来ゲートウェイ機能となるいわゆる三角地の活用については、重要文化財に指定されていない赤れんが倉庫の活用について、海軍記念館の移転先などの意見も出たが、ゲートウェイでの建物の活用は案内・商業的な活用が良いとの意見が多数を占めた。自衛隊所有の国道沿いの3棟に海軍記念館を移転してはとの別の発言者の提案に賛同するとの意見を述べた。何としてでも、将来的に市行政管理となる建物に、旧軍関係資料の展示は断固阻止したいとの思いが一瞬動いたからであった。

最後に、市長からの「言い残したことはありませんか」との問いに対して、日頃から課題解決したい案件としていた無電柱化についての傍聴者2名からの意見に共鳴する形で、明治・大正時代の景観を目指すなら、ぜひ無電柱化に取り組んでいただきたいと述べた。一応、対話集会の記録として残したい想いは実現できたのではないかと思っている。しかし、久しぶりの対面での発言で、団体代表として責任を感じつつ参加したが、終えた後にいつにない疲れを感じたのは、歳のせいなのか。

翌日、言い忘れたことに気づいた。それは、これまで長年行政が進めている通過型観光人口増を目指すばかりでなく、今後は夜の景観整備とイベント開催による滞在型観光振興に取り組み、宿泊客増による経済効果を図る政策転換を要望する事を失念したことが悔やまれる。



国3棟れんが倉庫とそのディテール



北吸三角地の17号倉庫

3. 戦争の惨禍を免れた歴史遺産を考える

小野 章（理事）

イタリアのフィレンツェ旧市街には、5世紀程前のルネサンス期の街が凍結保存のように残されている。第二次大戦でイタリアは1943年には政変を経て降伏、その後この街では市街戦があったが、幸い壊滅的な損傷は被らなかった。イタリア人の戦争に対する「合理的な判断」のお陰で、今世界の人々はこの国の輝ける建築遺産と美術を堪能できるのである。

映画「パリは燃えているか」（1966年）では、第二次大戦中ドイツ軍が占領するパリに連合軍が迫り、ドイツのヒトラー総統がパリの歴史的建築群や文化施設などを徹底破壊した上で迎え撃つよう命令するが、ドイツ軍司令官はこれを実行するふりをして降伏したという史実による映画である。フランス人はこのドイツ人には心底感謝しているのではないか。

京都駅周辺の三十三間堂や東寺や東西本願寺などを拝観すると運命の気まくれを感じる。先の大戦末期に同市への原爆投下計画の提案はスチムソン米国陸軍長官に却下された。この陸軍長官は、特に天皇家に

縁深い京都市への原爆投下が日本人に与える怒りが戦争の延長につながることに思いを致し、投下計画を却下したと推測されるが、結果的に京都市の歴史遺産は、一人の権限者の判断で救われたのである。

以上の3例で判断すると、歴史遺産の運命は、戦争の動向次第で決まることもあるし、時の権限者の判断で決まることもあると分かる。

現在展開中のウクライナ戦争の先行きは混沌とし、首都キーウが総攻撃されることもありうる。その際市中心部の大聖堂などユネスコ世界遺産群が消滅する可能性もある。これを中止できる権限者は、ロシアの大統領だが、彼には文明破壊への躊躇があるように思われない。ここで思うのは、フィレンツェ、パリ、キーウは京都市の姉妹都市で、長年交流している蓄積である。この際京都市は3市と連絡を取り合い、国際社会に対してキーウの世界遺産の破壊を止めさせる働きかけができないものだろうか。



フィレンツェ旧市街眺望



聖ソフィア大聖堂（キーウ）

4. 【近代化遺産の保存に向けた取り組みについて】 令和5年10月20日の舞鶴市長定例会見（市HPより）

1989年に初めて赤れんが倉庫のライトアップが行われ、舞鶴市における近代化遺産の保存と活用の取り組みがスタートし、来年で35年を迎えます。今では、「赤れんがのまち 舞鶴」が定着し、全国近代化遺産活用連絡協議会の会長を舞鶴市長が務めるなど国内有数の近代化遺産保存活用の先進地として確固たる地位を築いています。

■ どうして、さらに一步踏み出すのか

舞鶴の近代化遺産も築100年を超えるものが多くなり、赤れんが倉庫のように活用が進むものもあれば、姿を消していくものもあります。そこで、これからの近代化遺産の保存をさらに一步踏み出すための準備を始めます。

■ 近代化遺産 保存のための一步

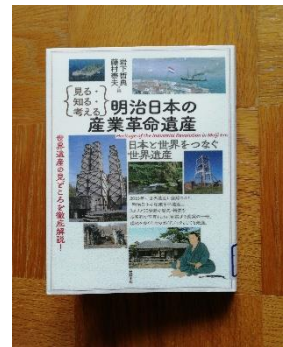
近代化遺産は造られた歴史的背景や景観も含めて価値があるものであり、舞鶴の歩みの一場面を私達に伝える歴史の証言者です。近代化遺産を次世代へ伝えることは歴史と文化を生かした郷土愛の醸成であり、それらを保存（現状保存・記録保存）するための指針となる近代化遺産保存計画の策定を目指します。

今年度は市内全域に存在する近代化遺産のデータベース構築に向けた準備をはじめます。近代化遺産保存計画策定に向けた審議会設置の準備（委員の選定調整、条例提案準備など）

https://www.city.maizuru.kyoto.jp/shicho/cmsfiles/contents/0000011/11693/2_231020bunka.pdf

5. 図書のご紹介：「明治日本の産業革命遺産」 岩下哲典・藤村泰夫編 勉誠出版刊 本体2,400円

副題は「日本と世界を繋ぐ世界遺産」。2015（平成27）年にユネスコ世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼・造船・石炭産業」を構成する8エリア・23資産の歴史・概要を写真と共に解説する本です。編者の岩下氏は解説で、この産業遺産には「サムライスピリット」が濃厚に見え隠れすると述べています。即ち、幕末の欧米列強の艦船、特にペリー艦隊の来航と外圧的開国を迫られた顛末を見た武士（軍人）たちが、所属藩ひいては日本を守るために懸命に努力した形跡がこの遺産ではないかとしています。そのことは、解説項目に松下村塾まで含む点からも肯けます。本書は市図書館にあります。



編集後記

JR 舞鶴線は元々日露戦争の兵站線として建設されたものだった。その後日本海海戦で完勝したので米国が仲介してくれ講和に漕ぎつけられた。日本の継戦力は尽きており実質引き分けだったが「勝利した」との用語が使用された。又これを機に「一等国」の仲間入りを果たしたとされた。その後第一次大戦では、負担の少ない割にかなりの権益を獲得した。保阪正康氏（「戦争の近現代史」）によると、日露戦争以後日本は戦争を最大の「営業品目」にして破滅まで突き進んだ。司馬遼太郎氏の「雑談『昭和』への道」の再放送（NHK）を先日視たが、大正末から敗戦まで日本が軍官僚によって「魔法の森」にさせられ、亡国に至ったとする。仮に、あのとき「勝利」「一等国」という用語によって、国の運命があらぬ方向へ導かれたのだとすると、用語の選定にはつくづく注意が必要だと感じる。

本会の目的（要旨）：赤煉瓦を活かしたまちづくり活動、赤煉瓦ネットワーク交流と他市のまちづくり支援など。

会員の資格：会費納入者 年会費（個人1,000円、団体5,000円）。ご寄附も受け付けます。

会費・寄付等 振込先：①ゆうちょ銀行 四四ノ店（ヨンヨンハチ店）普通 3679505 □座名義 アカレンガクラブマイツル

又は ②京都北都信用金庫 舞鶴中央支店 普通 □座番号0686767 □座名義 アカレンガクラブマイツル